

ひ給へる様、匂ひ似る物無くめでたし。月頃の積りを、つき／＼しう聞え給はむも、眩き程になりければ、櫛を聊か折りて持給へりけるを、差入れて、鬘變らぬ色をしるべにてこそ、齋垣をも越え侍りにけれ。さも心憂く一と聞え給へば、

御息所 神垣は標の杉も無きものを如何に紛へて折れる櫛ぞ

と聞え給へば、

源少女子が邊と思へば櫛葉の香をなつかしみ尋めてこそ折れ

大方の氣はひ煩はしけれど、御簾許りは引き著て、長押に押懸りて居給へり。心に任せて見奉りつべく、人も慕ひざまに思したりつる年月は、長閑なりつる御心驕りに、さしも思されざりき。又心の中に、如何にぞや、疵ありて思ひ聞え給ひし後、將た哀れも冷めつゝ、斯く御中も隔たりぬるを、珍らしき御對面の昔覺えたるに、哀れと思し亂るゝ事限りなし。來し方行く先思し續けられて、心弱く泣き給ひぬ。女は、然しも見えじと思し憤むれど、え忍び給はぬ御氣色を、いよいよ心苦しう、なほ思し止まるべき様をぞ聞え給ふめる月も入りぬるにや、哀れなる空を眺めつゝ、怨み聞え給ふに、許多思ひ集め給へる辛さも消えぬべし。やう／＼今はと思ひ離れ給へるに、然ればよと、なか／＼心動きて思し亂る。殿上の若君達など打連れて、とかく立ち煩ふなる庭のたゞずまひも、實に艶なる方に、うけばりたる有様なり。思ほし残す事無き御中らひに、聞え交し給ふ事ども、まねびやらむ方なし。やう／＼明け行く空の氣色、殊更に作り出でたらむやうなり。

源曉の別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな
出で難てに、御手を執へてやすらひ給へる、いみじう懐かし。風いと冷やかに吹きて、松蟲の鳴き枯したる聲も、折知り顔なるを、然して思ふ事なきだに、聞き過し難げなるに、まして理なき御心惑ひどもに、なか／＼事も行かぬにや。

御息所 大方の秋の別れも悲しきに鳴く音な添へそ野邊の松蟲

悔しき事多かれど甲斐無ければ、明け行く空もはしたなくて出で給ふ。道の程いと露けし。女もえ心強からず、名残哀れにて眺め給ふ。仄見奉り給へる月影の御容貌、なほ留まれる匂ひなど、若き人々は身に染めて、遅ちもしつべく愛で聞ゆ。女房達、いかばかりの道にてか、斯かる御有様を見捨てては、別れ聞えむ」と、あいなく涙ぐみ合へり。

御文、常よりも細やかなるは、思し靡くばかりなれど、又打返し定めかね給ふべき事ならねば、いと甲斐無し。男は、然しも思はぬ事をだに、情の爲めには能く言ひ續け給ふべかめれば、ましておし並べての列には思ひ聞え給はざりし御中の、斯くて背き給ひなむとするを、口惜しうもいとほしうも思し惱むべし。旅の御装束より初め人々のまで、何くれの御調度など、嚴しう珍らしき様にて、訪らひ聞え給へど、何とも思されず。澹々しう心憂き名をのみ流して、淺ましき身の有様を、今始めたらむやうに、程近くなるまゝに、起き臥し歎き給ふ。齋宮は、若き御心に、不定なりつる御出立の、斯く定まり行くを、嬉しとのみ思したり。世の人は、例なき事と、もどきも哀れがりも様々に聞ゆべし。何事も、人にもどき扱はれぬ際は安げなり。なか／＼世に抜け出

でぬる人の御邊は、所狭き事多くなむ。
十六日、桂川にて御被し給ふ。常の儀式に優りて、長奉送使など、然らぬ上達部も、やんごとな
く覺えあるを擇らせ給へり。院の御心寄せもあればなるべし。出で給ふ程、大將殿より例の盡き
せぬ事ども聞え給へり。かけまくも畏き御前にとて、木綿に付けて、

源 鳴る神だにこそ、

八洲守る國つ御神も心あらば飽かぬ別れの中をことわれ

思ひ給ふるに、飽かぬ心地し侍るかな。

とあり。いと騒がしき程なれど、御返りあり。宮の御をば、女別當して書かせ給へり。

齋宮 國つ神空にことわる中ならばなほざり事を先づや正さむ

大將は、御有様ゆかしうて、内裏にも參らまほしう思せど、打棄てられて見送らむも、人惡き心
地し給へば、思し留まりて、つれづれに眺め居給へり。宮の御返りの大人々々しきを、微笑みて
見居給へり。御年の程よりはをかしうもおはすべきかなと、たゞならず、斯様に例に違へる煩は
しさに、必ず心懸かる御辭にて、いとよう見奉りつべかりし幼稚き御程を、見ずなりぬること妬
けれ。世の中定めなければ、對面する様もありなむかしなど思す。心にくく由ある御氣はひなれ
ば、物見車多かる日なり。申の時に、内裏に參り給ふ。御息所、御輿に乗り給へるにつけても、
父大臣の限りなき筋に思し心ざして、いつき奉り給ひし有様變りて、末の世に内裏を見給ふにも、
物のみ盡きせず哀れに思さる。十六にて故宮に參り給ひて、二十にて後れ奉り給ふ。三十にてぞ、

今日また九重を見給ひける。

御息所 そのかみを今日はかけじと忍ぶれど心のうちに物ぞ悲しき
齋宮は十四にぞなり給ひける。いと美しうおはする様を、麗はしうし奉り給へるぞ、いとゆゝし
きまで見え給ふを、帝御心動きて、別れの御櫛奉り給ふ程、いと哀れにて、潮垂れさせ給ひぬ。
出で給ふを待ち奉るとて、八省に立て續けたる、出車どもの袖口色合も、日慣れぬ様に心憎き氣
色なれば、殿上人どもも、私の別れ惜しむ多かり。暗う出で給ひて、二條より洞院の大路を折れ
給ふほど、二條院の前なれば、大將の君いと哀れに思されて、櫛に挿して、

源 振捨てて、日は行くとも鈴鹿川八十瀬の浪に袖は濡れじや

と聞え給へれど、いと暗う物騒がしき程なれば、又の日、關の彼方よりぞ、御返しある。

御息所 鈴鹿川八十瀬の浪に濡れくず伊勢まで誰か思ひおこせむ

事そぎて書き給へるしも、御手いと由々しく艶きたるに、哀れなる氣を少し添へ給へらましかば
と思す。霧いたう降りて、たゞならぬ朝ぼらけに、打眺めて獨言ちおはす。

源 行く方を眺めも遣らむこの秋は逢坂山を霧な隔てそ

西の對にも渡り給はで、人遣りならず、物寂しげに眺め暮し給ふ。まして旅の空は、いかに御心
盡しなる事多かりけむ。

院の御惱み、神無月になりては、いと重くおはします。世の中に惜しみ聞えぬ人なし。内にも思
し歎きて行幸あり。弱き御心地にも、春宮の御事を、返すく聞えさせ給ひて、次には大將の御

事、院侍りつる世に變らず、大小の事を隔てず、何事も御後見と思せ。齡の程よりも、世を政
 たむにも、をさく憚りあるまじうなむ見給ふる。必ず世の中保つべき相ある人なり。然るによ
 りて、煩はしさに、親王にもなさず、直人にて、朝廷の御後見をさせむと、思う給へしなり。
 その心違へさせ給ふなと、哀れなる御遺言とも多かりけれど、女のまねぶべき事にしあらねば、
 この片端だに、傍痛し。帝も、いと悲しと思して、更に違へ聞えさすまじき由を、返すく聞え
 させ給ふ。御容貌もいと清らに、老成優らせ給へるを、嬉しく頼もしく見奉らせ給ふ。限りあれ
 ば急ぎ還らせ給ふにも、なかくなる事多くなむ。春宮も、一度にと思召しけれど、物騒がしき
 により、目を更へて渡らせ給へり。御年の程よりは、大人び美しき御様にて、戀しと思ひ聞えさ
 せ給ひける積りに、何心もなく嬉しと思して、見奉り給ふ御氣色いと哀れなり。中宮は涙に沈み
 給へるを、見奉らせ給ふにも、さまざま御心亂れて思召さる。萬づの事を聞え知らせ給へど、い
 と物果敢なき御程なれば、後めたく悲しう見奉らせ給ふ。大將にも、朝廷に仕う奉り給ふべき御
 心遣ひ、この宮の御後見し給ふべき事を、返すく宣はす。夜更けてぞ歸らせ給ふ。残る人なく
 仕う奉りてのしる様、行幸に劣る差別なし。飽かぬ程にて還らせ給ふを、いみじう思召す。
 大后も參り給はむとするを、中宮の斯く添ひおはするに御心置かれて、思しやすらふ程に、おど
 ろしくしき様にもおはしませで、崩れさせ給ひぬ。足を空に思ひ惑ふ人多かり。御位を去らせ給
 ふと言ふばかりにこそあれ、世の政を鎮めさせ給へる事も、わが御世の同じ事にておはしま
 づるを、帝はいと若うおはします、祖父大臣、いと急にさがなうおはして、その御儘になりなむ

世を、如何ならむと、上達部殿上人皆思ひ歎く。中宮、大將殿などは、まして勝れて物も思し分
 かれず、後々の御事など、孝じ仕う奉り給ふ様も、そこらの御子達の御中に勝れ給へるを、理な
 がらいと哀れに世の人も見奉る。藤の御衣に褒れ給へるにつけても、限りなく清らに心苦しげな
 り。去年今年と打續き、斯かる事を見給ふに、世もいと味氣無う思さるれば、斯かる序にも、先
 づ思し立たるゝ事はあれど、また様々の御遺言多かり。御四十九日までは、女御御息所達、皆院
 に集ひ給へりつるを、過ぎぬれば、散りくりに罷出給ふ。十二月の二十日なれば、大方の世の中
 綴ぢむる空の氣色につけても、まして晴るゝ世無き中宮の御心の中なり。大后の御心をも知り給
 へれば、心に任せ給へらむ世のはしたなく住み憂からむを思すよりも、馴れ聞え給へる年頃の御
 有様を思ひ出で聞え給はぬ時の閒なきに、斯くてもおはしますまじう、皆外々へと出で給ふ程悲
 しき事限りなし。宮は、三條の宮に渡り給ふ。御迎へに、兵部卿の宮參り給へり。雪打散り風烈
 しうて、院の内やうく人目離れ行きてしめやかなるに、大將殿此方に參り給ひて、舊き御物語
 聞え給ふ。御前の五葉の雪に萎れて、下葉枯れたるを見給ひて、親王、
 兵部卿 蔭廣み頼みし松や枯れにけむ下葉散りゆく年の暮かな
 何ばかりの事にもあらぬに、折から物哀れにて、大將の御袖いたう濡れぬ。池の隙なう氷れるに、
 孤冴え渡る池の鏡のさやけきに見なれし影を見ぬぞ悲しき
 と、思すまゝに餘り若々しうぞあるや。王命婦、
 年暮れて岩井の水も氷閉ぢ見し人影の褪せも行くかな

其の序にいと多かれど、さのみ書き續くべき事かは。渡らせ給ふ儀式變らねど、思ひなしに哀れにて、舊き宮は、却りて旅心地し給ふにも、御里住絶えたる年月の程、思し廻らざるべし。年かへりぬれど、世の中今めかしき事なく静かなり。まして大將殿は、物憂くて籠り居給へり。除目の頃など、院の御時をば更にもいはず、年頃劣る差別なくて、御門の邊、所なく立ち込みたりし馬車薄らぎて、侍に宿直物の袋をさく見えす。親しき家司ども許り、殊に急ぐ事無げにてあるを見給ふにも、今よりは斯くこそはと思ひ遣られて、物すさまじくなむ。御匣笥殿は、二月に尙侍になり給ひぬ。院の御思ひに、やがて尼になり給へる代りなりけり。やんごとなくもてなして、人柄もいと善く坐すれば、數多参り集まり給ふ中にも、勝れて時めき給ふ。后は、里がちにおはしまして、参り給ふ時の御局には梅壺をしたれば、弘徽殿には尙侍の君住み給ふ。登花殿の埋れたりつるに、晴れくしうなりて、女房なども數知らず集ひ参りて、今めかしう花やぎ給へど、御心のうちは、思ひの外なりし事どもを忘れ難う思ひ歎き給ふ。いと忍びて通はし給ふ事は、なほ同じ様なるべし。物の聞えもあらば如何ならむと思ししながら、例の御癖なれば、今しも御志増るべかめり。院のおはしましつる世こそ憚り給ひつれ、后の御心逸速くて、方々思し詰めたる事どもの報いせむと思すべかめり。事に觸れてはしたなき事のみ出で来れば、斯かるべき事とは思ししかど、見知り給はぬ世の憂さに、立ちまふべくも思されず。左大臣も、すさまじき心地し給ひて、殊に内裏にも参り給はず。故姫君を、引き除きてこの大將の君に聞え附け給ひし御心を、后は思しおきて、宜しうも思ひ聞え給はず。大臣の御中も、固よりそばくしうおは

するに、故院の御世には我が儘におはせしを、時移りて、したり顔におはするを、味氣なしと思したるも理なり。大將は有りしに變じ渡り通ひ給ひて、侍ひし人々をも、なか／＼に細かに思し掟て、若君をかしづき思ひ聞え給へる事限りなければ、哀れに有り難き御心と、いとよいたづき聞え給ふ事ども同じ様なり。限りなき御覺えの、餘り物騒がしきまで暇なげに見え給ひしを、通ひ給ひし所々も、方々に絶え給ふ事どもあり。輕々しき御忍び歩行も、あいなう思しなりて、殊にし給はねば、いと長閑やかに、今しもあらまほしき御有様なり。西の對の姫君の御幸ひを、世の人も愛で聞ゆ。少納言なども、人知れず、故尼上の御祈りの驗と見奉る。父親王も思ふ様に聞え交し給ふ。嫡腹の限りなくと思すは、はか／＼しうも得あらぬに、妬げなる事多くて、繼母の北の方は、安からず思すべし。昔物語に、殊更に作り出でたる様なる御有様なり。齋院は御服にて、下り居給ひにしかば、朝顔の姫君は、代りに居給ひにき。賀茂の齋院には、孫王の居給ふ例多くもあらざりけれど、然るべき女親王やおはせざりけむ。大將の君、年月経れど、猶御心離れ給はざりつるを、斯う筋異になり給ひぬれば、口惜しと思す。中將に音づれ給ふ事も同じ事にて、御文などは絶えざるべし。昔に變る御有様などをば、殊に何とも思したらず、斯様の果敢なし事どもを、紛るゝ事無きまゝに、此方彼方と思し惱めり。帝は、院の御遺言違へず、哀れに思したれど、若うおはします中にも、御心なよびたる方過ぎて、強き所おはしまさぬなるべし、母后祖父大臣とり／＼にし給ふ事は、得背き給はず、世の政御心に叶はぬやうなり。煩はしさのみ増されど、尙侍の君は、人知れぬ御志通へば、理無くても覺

真なくはあらず。五壇の御修法の初めにて、懐しみおはします隙を伺ひて、例の夢のやうに聞え給ふ。かの昔覺えたる細殿の局に、中納言の君紛らはして入れ奉りたり。人目も繁き頃なれば、常よりも端近なるを、空恐ろしう覺ゆ。朝夕に見奉る人だに、飽かぬ御様なれば、まして珍らしき程にのみある御對面の、いかでかは疎かならむ。女の御様も、實にぞめでたき御盛りなる。重りかなる方は如何あらむ。をかしう艶き若びたる心地して、見まほしき御氣はひなり。程なく明け行くにやと覺ゆるに、唯此處にしも、「宿直申し侍ふ」と聲作るなり。又この邊に隠るへたる近衛司ぞあるべき。腹穢き傍輩の教へおこするぞかしと、大將は聞き給ふ。をかしきものから煩はし。此處彼處尋ね歩いて、武官「寅一つ」と申すなり。女君、

心からかたぐ袖を濡らすかなあくと教ふる聲につけても
と宣ふ様、果敢無だちていとをかし。

源 歎きつゝ我が世は斯くて過せとや胸のあくべき時ぞともなく
靜心無くて出で給ひぬ。夜深き曉月夜のえも言はず霧り渡れるに、いといたう窶れて振舞ひなし給へるしも、似る物なき御有様にて、承香殿の御兄の頭中將、藤壺より出でて月の少し限ある立部の下に立てりけるを、知らで過ぎ給ひけむこそいとほしけれ。もどき聞ゆるやうもありなむかし。

斯様の事につけても、持て離れ強顔き人の御心を、且はめでたしと思ひ聞え給ふものから、我が心の引く方にては、なほ辛う心憂しと覺え給ふ折多かり。内裏に参り給はむ事は、初々しく所狭

く思しなりて、春宮を見奉り給はぬを、覺束なく覺え給ふ。又頼もしき人も物し給はねば、唯この大將の君をぞ、萬づに頼み聞え給へるに、なほ此の憎き御心の止まぬに、ともすれば御胸を潰し給ひつゝ、聊も氣色を御覺じ知らずなりにしを思ふだにいと怖ろしきに、今更に又然る事の聞えありて、我が身は然るものにて、春宮の御爲に必ず善からぬ事出で來なむと思すに、いと怖ろしければ、御祈りをさへせさせ給ひて、この事思ひ止ませ奉らむと、思し至らぬ事なく遁れ給ふを、如何なる折にかありけむ、淺ましうて近づき参り給へり。心深くたばかり給ひけむ事を、知る人無かりければ、夢のやうにぞありける。まねぶべきやうもなく聞え續け給へど、宮いとこよなく持て離れ聞え給ひて、果々は御胸をいたう惱み給へば、近う侍ひつる命婦、辨などぞ、淺ましう見奉り扱ふ。男は、憂しつらしと思ひ聞え給ふ事限りなきに、來し方行く先、搔昏らす心地して、現心も失せにければ、明け果てにけれど、出で給はずなりぬ。御惱みに驚きて、人々近う参りて繁う紛へば、我にもあらで、簾籠に押し入れられておはす。御衣ども隠し持たる人の心地ども、いとむつかし。宮は、物をいと佗しと思しけるに、御氣上りて、猶惱ましうせさせ給ふ。兵部卿の宮、宮の大夫など参りて、僧召せなど騒ぐを、大將いと佗しう聞きおはす。辛うじて暮れゆく程にぞ癒り給へる。斯く籠り居給へらむとは思しもかけず、人々も又御心惑はさじとて、斯くなむとも申さぬなるべし。晝の御座に膝行り出でておはします。宜しう思さるゝなめりとて、宮も罷出給ひなどして、御前人少なになりぬ。例も氣近く憤らせ給ふ人少なければ、此處彼處の物の後などにぞ侍ふ。命婦の君などは、如何にたばかりて出し奉らむ。今宵さへ御氣上らせ給

はむ、いとほしう」など打私語き扱ふ。君は、塗籠の戸の細目に開きたるを、やを押し開けて、御屏風の間に傳ひ入り給ひぬ。珍らしく嬉しきにも、涙は落ちて見奉り給ふ。藤壺猶いと苦しうこそあれ。世や盡きぬらむ」とて、外の方を見出し給へる。傍目、言ひ知らず艶かしう見ゆ。御菓物をだにとて参り据ゑたり。箱の蓋などにも、懐かしき様にてあれど、見入れ給はず。世の中をいたう思し惱める氣色にて、長閑に眺め入り給へる、いみじうらうたげなり。簪、頭つき、御髪のかゝりたるさま、限りなき匂はしさなど、唯かの對の姫君に違ふ所なし。年頃少し思ひ忘れ給へりつるを、淺ましきまで覺え給へるかなと見給ふまゝに、少し物思ひの晴け所ある心地し給ふ。氣高う恥かしげなる様なども、更に他人と思ひ分き難きを、猶限りなく、昔より思ひ泌め聞えてし心の思ひなしにや、殊にいみじう老成優り給ひにけるかなと、類なく覺え給ふに、心惑ひして、やをら、御帳の中にかゝつらひ入りて、御衣の袂を引き鳴らし給ふ氣はひ著く、さと匂ひたるに、淺ましうむくつけう思されて、やがて平伏し給へり。見だに向き給へかしたと、心疚しう辛くて、引き寄せ給へるに、御衣を滑し置きて、膝行り退き給ふに、心にもあらず、御髪の取添へられたりければ、いと心憂く、宿世の程思し知られて、いみじと思したり。男も、許多世を持て鎮め給ふ御心皆亂れて、現し様にもあらず、萬づの事を泣く／＼恨み聞え給へど、眞に心づきなしと思して、御答へも聞え給はず。たゞ、藤壺心地のいと惱ましきを、斯からぬ折もあらば聞えてむ」と宣へど、盡きせぬ御心の程を言ひ續け給ふ。流石にいみじと聞き給ふ節も交るらむ。有らざりし事にはあらねど、改めていと口惜しう思さるれば、懐かしきものから、いとよう

宣ひ遁れて、今宵も明け行く。せめて隨ひ聞えざらむも忝く、心恥かしき御氣はひなれば、また斯ばかりにても、時々いみじき憂へをだに晴け侍りぬべくば、何のおほけなき心も侍らじ」など、弛め聞え給ふべし。斜なる事だに、斯様なる中らひは哀れなる事も添ふなるを、まして類なげなり。明け果つれば、二人していみじき事どもを聞え、宮は、半は亡きやうなる御氣色の心苦しければ、源世の中に在りと聞召されむもいと恥かしければ、やがて亡せ侍りなむも、又この世ならぬ罪となり侍りぬべき事」など聞え給ふもむくつけきまで思し入れり。

源「逢ふ事の難きを今日に限らずば今幾世をか歎きつゝ經む

御羅絆にもこそ」と聞え給へば、流石に打歎き給ひて、

藤壺 長き世の恨を人に残しても且は心をあたとしらなむ

果敢なく言ひなさせ給へる様の、言ふ由なき心地すれど、人の思さむ所も我が御爲も苦しければ、我にもあらで出で給ひぬ。

何處を面にかは又も見え奉らむ。いとほしと思し知るばかりと思して、御文も聞え給はず。打絶えて内裏春宮にも参り給はず、籠りおはして、起き臥し、いみじかりける人の御心かなと、人惡く戀しう悲しきに、心魂も失せにけるにや、惱ましうさへ思さる。物心細く、何ぞや、世に經れば憂さこそ増れと思し立つには、この女君のいとらうたげにて、哀れに打頼み聞え給へるを、振り捨てむ事いと難し。宮も、その名殘例にもおはしませず。斯う殊さらめきて籠り居、音づれ給はぬを、命婦などはいとほしがかり聞ゆ。宮も、春宮の御爲を思すには、御心置き給はむ事いと

ほしく、世を味氣なきものに思ひなり給はば、直路に思し立つ事もやと、流石に苦しう思さるべし。斯かる事絶えずば、いとどしき世に、憂き名さへ漏り出でなむ。大后のあるまじき事に宣ふなる位をも去りなむと、やうく思しなる。院の思し宣はせし様の、斜ならざりしを思し出づるにも、萬づの事ありしにもあらず變り行く世にこそあめれ。戚夫人の見けむ目の様にこそあらずとも、必ず人笑へなる事ありぬべき身にこそあめれなど、疎ましう過し難う思さるれば、背きなむ事を思し取るに、春宮見奉らで面變りせむ事哀れに思さるれば、忍びやかにて参り給へり。大將の君は、然らぬ事だに思し寄らぬ事なく、仕う奉り給ふを、御心地惱ましきに事託けて、御送りにも参り給はず。大方の御訪らひは同じやうなれど、無下に思し屈しにけると、心知るどちはいとほしがり聞ゆ。宮はいみじう美しう大人ひ給ひて、珍らしう嬉しと思して、睦れ聞え給ふを、悲しと見奉り給ふにも、思し立つ筋はいと難げなれど、内裏邊を見給ふにつけても、世の有様哀れに果敢なく、移り變る事のみ多かり。大后の御心もいと煩はしくて、出で入り給ふにもはしたなく、事に觸れて苦しければ、宮の御爲にも危く、忌々しう萬づにつけて思し亂れて、藤壺御覽せで久しからむ程に、容貌の異様にてうたてげに變りて侍らば、如何思さるべき」と聞え給へば、御顔を打まもり給ひて、春宮式部が様にや。いかでか然はなり給はむ」と、笑みて宣ふ。言ふ甲斐無く哀れにて、藤壺それは、老いて侍れば醜きぞ。然はあらで、髪はそれよりも短くて、黒き衣などを著て、夜居の僧のやうになり侍らむとすれば、見奉らむ事も、いとど久しかるべきぞ」ととて泣き給へば、眞實たちて、春宮久しうおはせねば戀しきものを」ととて、涙の落つれば、

恥かしと思して流石に背き給へる、御髪はゆらくと清らにて、まみの懐かしげに匂ひ給へる様、大人び給ふまゝに、唯かの御顔を脱ぎ滑べ給へり。御齒の少し朽ちて、口の内黒みて、笑み給へる薫り美しきは、女にて見奉らまほしう清らなり。いと斯うしも覺え給へるこそ心憂けれと、玉の取に思さるゝも、世の煩はしさの、空恐ろしう覺え給ふなりけり。大將の君は、宮をいと戀しう思ひ聞え給へど、淺ましき御心の程を、時々思ひ知る様にも見せ奉らむと、念じつゝ過し給ふに、人悪くつれなく思さるれば、秋の野も見給ひがてら、雲林院に詣で給へり。故母御息所の御兄の律師の籠り給へる坊にて、法文など讀み、行ひせむと思して、二三日おはするに、哀れなる事多かり。紅葉のやうく色づき渡りて、秋の野のいと艶きたるなど見給ひつゝ、故郷も忘れぬべく思さる。法師輩の才ある限り召し出でて、論議せさせて聞召させ給ふ。所柄に、いと世の中の常なさを思し明しても、なほ、「憂き人しもぞ」と思し出でらるるおし明け方の月影に、法師輩の関伽奉るとて、からくと鳴らしつゝ、菊の花、濃き薄き紅葉など、折り散らしたるも果敢なけれど、この方の營みは、此の世もつれなくならず、後の世はた頼もしげなり。さも味氣なき身を持つて憫むかななど、思し續け給ふ。律師のいと尊き聲にて、「念佛衆生攝取不捨」と打述べて行ひ給へるがいと羨ましければ、何ぞやと思しなるに、先づ姫君の心に懸かりて思ひ出でられ給ふぞ、いと悪き御心なるや。例ならぬ日數も、覺東なくのみ思さるれば、御文ばかりぞ繁う聞え給ふめる。

源行き離れぬべしやと、試み侍る道なれど、つれなくも慰め難う、心細さ増りてなむ。聞き

さしたる事ありて、やすらひ侍る程を如何に、
など、陸奥紙に、打解け書き給へるさへぞめでたき。

源 浅茅生の露の宿りに君を置きて四方の嵐そしづ心なき
など細やかなるに、女君も打泣き給ひぬ。御返し白き色紙に、

紫風吹けば先づぞ亂るゝ色變る浅茅が露にかゝるさゝかに

とのみあり。源 御手はいとをかしうのみなり増るものかな」と獨言ちて、美しと微笑み給ふ。
常に書き交し給へば、我が御手にいとよく似て、今少し艶かしう、女しき所書き添へ給へり。何
事につけても、けしうはあらず生ふし立てたりかしと思す。吹きかふ風も近き程にて、齋院にも
聞え給ひけり。中將の君に、

源 氏 物 語

源 斯く旅の空になむ物思ひに憧れにけるを、思し知るにもあらずかし。
など恨み給ひて、御前には、

昔を今にと思ひ給ふるも甲斐なく、取返されむ物のやうに。

と馴々しげに、唐の浅緑の紙に、桐に木綿つけなど、神々しうしなして參らせ給ふ。御返り中將、
中將 紛るゝ事なくて、來し方の事を思ひ給へ出づるつれづれのまゝには、思ひ遣り聞えさす
る事多く侍れど、甲斐なくのみなむ。

と少し心留めて多かり。御前のは、木綿の片端に、

齋院「そのかみや如何はありし木綿襟心に掛けて忍ぶらむ故

近き世に」とぞある。御手細やかにあらねど、らうくしう、草などをかしうなりにけり。ま
して、朝顔も老成優り給へらむかしと、思ひ遣るもたゞならず。怖ろしや、あはれこの頃ぞかし
と、野宮の哀れなりし事と思し出でて、怪しう様の物と、神怨めしう思さるゝ御癖の見苦しきぞ
かし。理無う思さば然もありぬべかりし年頃は、長閑に過し給ひて、今は悔しう思さるべかめる
も、怪しき御心なりや。院も、斯くなべてならぬ御心ばへを見知り聞え給へれば、邂逅なる御返
しなどは、得しも持て離れ聞え給ふまじかめり。少しあいなき事なりかし。六十巻といふ文讀み
給ひ、覺束なき所々、解かせなどしておはしますを、山寺にはいみじき光行ひ出し奉れりと、佛
の御面目ありと、卑しの法師輩まで喜び合へり。しめやかにて、世の中を思ほし續くるに、歸らむ
事も物憂かりぬべけれど、一人の御事思し遣るが羅網なれば、久しうも得おはしませで、寺に
も御誦經厳しうせさせ給ふ。あるべき限り上下の僧ども、その邊の山賤まで物賜ひ、尊き事の限
りを盡くして出で給ふ。見奉り送るとて、此面彼面に卑しきしばふるひ人ども集まり居て、涙を
落しつゝ見奉る。黒き御車の内にて、藤の御袂に窺れ給へれば、殊に見え給はねど、仄かなる御
有様を、世になく思ひ聞ゆべかめり。
女君は、日頃の程に、老成優り給へる心地して、いといたう静まり給ひて、世の中如何あらむと
思へる氣色の、心苦しう哀れに覺え給へば、あいなき心の、様々亂るゝや著からむ。「色變る」と
ありしもらうたう覺えて、常より殊に語らひ聞え給ふ。山土産に持たせ給へりし紅葉、御前に

御覽し比ぶれば、殊に染め増しける露の心も見過し難う、覺東なさまも人悪きまで覺え給へば、ただ大方にて宮に參らせ給ふ。命婦の許に、

源 入らせ給ひにけるを、珍らしき事と承るに、宮の間の事、覺東なくなり侍りにければ、靜心なり侍りにける。紅葉は、一人見侍るに錦暗う思ひ給ふればなむ。折よく御覽せさせ給へ。などあり。實にいみじき枝どもなれば、御目留まるに、例の聊かなるものありけり。人々見奉るに、御顔の色も移ろひて、なほ斯かる心の絶え給はぬこそいと疎ましけれ。あたら、思ひ遣り深うものし給ふ人の、ゆくりなく、斯様な事折々交せ給ふを、人怪しと見るらむかしと、心づきなう思されて、瓶に挿させて、廂の柱の下に押し遣らせ給ひつ。大方の事ども、宮の御事に觸れたる事などをば、打頼める様に、すくよかなる御返りばかり聞え給へるを、然も心賢く、盡きせずとも恨めしう見給へど、何事も後見聞え慣らひ給ひにたれば、人怪しと見咎めもこそすれと思して、押出給ふべき日參り給へり。

先づ内裏の御方に參り給へれば、長閑やかにおはします程にて、昔今の御物語聞え給ふ。御容貌も、院にいとよう似奉り給ひて、今少し艶かしき氣添ひて、懐かしう和やかにぞおはします。互に哀れと見奉り給ふ。尙侍の君の御事も、なほ絶えぬ様に聞召し、氣色御覽する折もあれど、何かは、今始めたる事ならばこそあらめ、有り初めにける事なれば、さも心交さむに、似げなかるましき人の聞なりかすとぞ思しなして、咎めさせ給はざりける。萬づの御物語、文の道の覺東な

賢 思召さるゝ事どもなど、問はせ給ひて、又すき／＼しき歌語りなども、互に聞え交させ給ふ序に、かの齋宮の下り給ひし日の事、容貌のをかしうおはせしなど、語らせ給ふに、我も打解けて、野宮の哀れなりし曙も、皆聞え出で給ひてけり。二十日の月やう／＼さし出でて、をかしき程なるに、帝遊びなどもせまほしき程かな」と宣はす。源 中宮の今宵能出給ふなる、訪らひにものし侍らむ。院の宣はせ置く事侍りしかば、又後見仕う奉る人も侍らざるに、春宮の御縁、いとほしう思ひ給へられ侍りて」と奏し給ふ。帝 春宮をば今の皇子になしてなど、宣はせ置きしかば、取り分きて心ざし物すれど、殊に差分きたる様にも、何事をかはとてこそ。年の程よりも、御手などの態と賢うこそ物し給ひけれ。何事にもはか／＼しからぬ自らの面起しになむ」と宣はすれば、源 大方し給ふ業など、いと敏く大人びたる様に物し給へど、まだいと片生に」など、その御有様など奏し給ひて、罷出給ふに、大宮の御兄の、藤大納言の子の頭の辨といふが、世に合ひ花やかなる若人にて、思ふ事なきなるべし、妹の麗景殿の御方に行くに、大將の御先を忍びやかに追へば、暫し立ちとまりて、「白虹日を買けり。太子懼ぢたり」といとゆるらかに打誦したるを、大將いと眩しと聞き給へど、咎むべき事かは。後の御氣色は、いと怖ろしう煩はしげにのみ聞ゆるを、斯う親しき人々も、氣色だと言ふべかめる事どもあるに、煩はしう思されけれど、強顔うのみもてなし給へり。源 御前に侍ひて、今まで更かし侍りにける」と聞え給ふ。月の花やかなるに、昔斯様な折は、御遊ひせさせ給ひて、今めかしうもてなさせ給ひしなど思し出づるに、同じ御垣の内ながら、變れる事多く悲し。

藝壺 九重に霧や隔つる雲の上の月を遙に思ひやるかな
と命婦して聞え傳へ給ふ。御氣はひも仄かなれど、懐かしう聞ゆるに、辛さも忘れられて、先づ涙ぞ落つる。

源「月影は見し世の秋に變らぬを隔つる霧の辛くもあるかな

霞も人のとか、昔も侍りける事にや」など聞え給ふ。宮は、春宮を飽かず思ひ聞え給ひて、萬づの事を聞えさせ給へど、深うも思し入れたらぬを、いとうしろめたく思ひ聞え給ふ。例はいと疾く大殿籠れるを、出で給ふまでは起きたらむと思すなるべし。恨めしげに思したれど、流石に得慕ひ聞え給はぬを、いと哀れと見奉り給ふ。

大將は、頭の辨の誦じつる事を思ふに、御心の鬼に、世の中煩はしう覺え給ひて、尙侍の君にも音づれ聞え給はで、久しうなりにけり。初時雨いつしかと氣色だつに、如何思しけむ、彼より、

源 物 氏 源

木枯の吹くにつけつゝ待ちし間に覺東なさの頃も經にけり

と聞え給へり。折も哀れに、強ちに忍び書き給ひつらむ御心ばへも憎からねば、御使留めさせ給ひて、唐紙ども入れさせ給へる御厨子開けさせ給ひて、なべてならぬを選り出でつゝ、筆なども心殊に引き整ひ給へる氣色艶なるを、御前なる人々、誰ばかりならむとつきじろふ。

源聞えさせても甲斐無き物慙にこそ、無下に頼れにけれ。身のみ物憂き程にて、

あひ見ずて忍ぶる頃の涙をもなべての秋の時雨とや見る

心の通ふとならば、如何に眺めの空も物忘れし侍らむ。

など、細やかになりにけり。斯様に驚かし聞ゆる類多かめれど、情なからず打返り言ち給ひて、御心には深う染まざるべし。

中宮は院の御果の事に打續き、御八講のいそぎを、様々に心遣ひせさせ給ひけり。十一月の朔日頃、御國忌なるに、雪いたう降りたり。大將殿より宮に聞え給ふ。

源別れにし今日は來れども見し人に行き逢ふ程を何時と頼まむ

何處にも、今日は物悲しう思さるゝ程にて、御返りあり。

貴

藤壺ながらふる程は憂けれど行きめぐり今日はその世に逢ふ心地して

殊に整ひてもあらぬ御書き様なれど、貴に氣高きは、思ひなしなるべし。筋變り今めかしうはあらねど、人には異に書かせ給へり。今日はこの御事も思ひ消ちて、哀れなる雪の雫に濡れく行

本

ひ給ふ。

十二月十餘日ばかり、中宮の御八講なり。いみじう尊し。日々に供養せさせ給ふ御經より初め、玉の軸、羅の表紙、帙寶の飾も、世に無き様に整へさせ給へり。然らぬ事の清らだに、尋常ならずおはしませば、まして理なり。佛の御飾、花机の覆などまで、眞の極樂思ひ遣らる。初めの日は先帝の御料、次の日は母后の御爲、又の日は院の御料、五卷の日なれば、上達部なども、世の慣ましさを得しも憚り給はで、いと數多參り給へり。今日の講師は、心殊に選らせ給へれば、薪樵る程より打初め、同じう言ふ言の葉も、いみじう尊し。親王達も、様々の捧物捧げて廻り給ふに、大將殿の御用意など、なほ似るもの無し。常に同じ事のやうなれども、見奉る度毎に、珍ら

しからむをば、如何はせむ。果の日は我が御事を結願にて、世を背き給ふ由佛に申させ給ふに、皆人々驚き給ひぬ。兵部卿の宮、大將の御心も動きて、淺ましと思す。親王は、半の程に立ち入り給ひぬ。心強う思し立つ様を宣ひて、果つる程に、山の座主召して、忌む事受け給ふべき由宣はず。御伯父の横川の僧都近う参り給ひて、御髪下し給ふ程に、宮の内揺りて、忌々しう泣き満ちたり。何と無き老い衰へたる人だに、今はと世を背く程は、怪しう哀れなる業を、まして、かねて御氣色にも出し給はざりつる事なれば、親王もいみじう泣き給ふ。参り給へる人々も、大方の事の様も、哀れに尊ければ、皆袖濡らしてぞ歸り給ひける。故院の皇子達は、昔の御有様を思し出づるに、いと哀れに悲しう思されて、皆訪らひ聞え給ふを、大將は立ち留まり給ひて、聞え出で給ふべき方も無く、昏れ惑ひて思さるれど、などか然しもと人見奉るべければ、親王など出で給ひぬる後にぞ、御前に参り給へる。やうく人静まりて、女房どもなど鼻打かみつゝ、所々に羣れ居たり。月は隈なきに、雪の光り合ひたる庭の有様も、昔の事思ひ遣らるゝに、いと堪へ難う思さるれど、いと能う思し鎮めて、盃如何様に思し立たせ給ひて、斯う俄には」と聞え給ふ。藤壺今始めて思ひ給ふる事にもあらぬを、物騒がしき様なりつれば、心亂れぬべくゝなど、例の命婦して聞え給ふ。御簾の中の氣はひ、許多集ひ給ふ人の衣の音なひ、しめやかに振舞ひなして、打身動きつゝ、悲しげさの慰め難げに漏り聞ゆる氣色、理にいみじと聞き給ふ。風烈しう吹き吹雪きて、御簾の中の匂ひ、いと物深き黒方に沁みて、名香の煙も仄かなり。大將の御匂ひさへ薫り合ひ、めでたう、極樂思ひ遣らるゝ夜の様なり。春

宮の御使も参れり。宣ひし様思ひ出で聞えさせ給ふにぞ、御心強さも堪へ難うて、御返りも聞えさせ遣らせ給はねば、大將ぞ言加へ聞えさせ給ひける。誰もく、ある限り心治まらぬ程なれば、思す事どもも打出で給はず。

源月の澄む雲居をかけて慕ふともこの夜の闇になほや惑はむ

と思ひ給へらるゝこそ、甲斐なく。思し立たせ給へる羨ましさは、限りなう」とばかり聞え給ひて、人々近う侍へば、様々亂るゝ心の中をだに、え聞え賜し給はず、いふせし。

藤壺 大方の憂きにつけては厭へどもいつかこの世を背き果つべき

かつ濁りつゝ」など、片方は御使の心しらひなるべし。哀れのみ盡きせよば、胸苦しうて罷出給ひぬ。殿にても、わが御方に一人打臥し給ひて、御目も合はず、世の中厭はしう思さるゝにも、春宮の御事のみぞ心苦しき。母宮をだに、公様にと思し掟てしを、世の憂きに堪へず、斯くなり給ひにたれば、舊の御位にても得おはせじ。我さへ見奉り捨ててばなど、思し明す事限りなし。今は斯かる方様の御調度どもをこそはと思せば、年の内にと急がせ給ふ。命婦の君も御供になりければ、それも心深う訪らひ給ふ。委しう言ひ續けむに事々しき様なれば、漏らしてけるなめり。然るは、斯様の折こそ、をかしき歌など出で来るやうもあれ、さうくしや。参り給ふも今は憤ましき薄らぎて、御自ら聞え給ふ折もありけり。思ひ泌めてし事は、更に御心に離れねど、まして有るまじき事なりかし。

年も變りぬれば、内裏邊花やかに、内裏踏歌など聞き給ふにも、物のみ哀れにて、御行ひしめや

かにし給ひつゝ、後の世の事をのみ思すに、頼もしく、むつかしかりし事は離れて思さる。常の御念誦堂をば然るものにて、特に建てられたる御堂の西の對の南に當りて、少し離れたるに渡らせ給ひて、取り分きたる御行ひせさせ給ふ。大將參り給へり。改まる微もなく、宮の内長閑に人目稀にて、宮司どもの親しきばかり、打頸垂れて、見なしにやあらむ、屈し甚げに思へり。白馬ばかりぞ、猶牽き變へぬものにて、女房などの見ける。所狭う參り集ひ給ひし上達部なども、道を避ぎつゝ牽き過ぎて、向の大殿に集ひ給ふを、斯かるべき事なれど、哀れに思さるゝに、千人にも代へつべき御様にて、深う尋ね參り給へるを見るに、あいなく涙くまる。客人も、いと物哀れなる氣色に、打見廻し給ひて、頼に物も宣はず。様變れる御住居に、御簾の端、御几帳も青鈍にて、隙々より仄見えたる薄鈍、山梔子の袖口など、なか／＼艶かしう、奥ゆかしう思ひ遣られ給ふ。解け渡る池の薄氷、岸の柳の氣色ばかりは時を忘れぬなど、さまざま眺められ給ひて、源宜も心ある一と、忍びやかに打誦し給へる、また無う艶かし。

源 長海布刈る海士の住處と見るからに先づ潮垂る、松が浦島

と聞え給へば、奥深うも有らず、皆佛に譲り聞え給へる御座所なれば、少し氣近き心地して、

と宣ふも仄聞ゆれば、忍ぶれど、涙ほろ／＼と零れ給ひぬ。世を思ひ澄ましたる尼君達の見らむもはしたなければ、言少なにて出で給ひぬ。女房達、さも類なく老成優り給ふかな。心許なき所無く世に榮え、時に逢ひ給ひし時は、然る一つものにて、何につけてか世を思し知らむと、推し

量られ給ひしを、今はいといたう思し鎮めて、果敢なき事につけても、物哀れなる氣色さへ添はせ給へるは、あいなる心苦しうもあるかななど、老い痴へる人々、打泣きつゝ愛で聞ゆ。宮も思し出づる事多かり。

司召の頃、この宮の人は賜はるべき官も得ず、大方の道理にても、宮の御賜りにても、必ずあるべき加階などをだにせずなどして、歎く類いと多かり。斯くても、何時しかと御位を去り、御封などの留まるべきにもあらぬを、事託けて變る事多かり。皆かねて思し捨ててし世なれど、宮人共も、據り所なげに悲しと思へる氣色どもにつけてぞ、御心動く折々あれど、我身を無きになしとも、春宮の御代を平らかにおはしまさばとのみ思しつゝ、御行ひ弛みなく勤めさせ給ふ。人知れず危くゆゝしう思ひ聞え給ふ事しあれば、我にその罪を輕めて免し給へと、佛を念じ聞え給ふに、萬づを慰め給ふ。大將も、然見奉り給ひて、理と思す。この殿の人どもも、又同じ様に辛き

事のみあれば、世の中はしたなく思されて籠り坐す。

左大臣も、公、私引き變へたる世の有様に、物憂く思して、致仕の表奉り給ふを、帝は、故院の、やんごとなく重き御後見と思して、長き世の固めと聞え置き給ひし御遺言を思召すに、捨て難きものに思ひ聞え給へるに、甲斐無き事と、度々用ゐさせ給はねど、せめて返さひ申し給ひて、籠り居給ひぬ。今はいと一族のみ、返す／＼榮え給ふ事限りなし。世の重しと物し給へる大臣の、斯く世を遁れ給へば、朝廷も心細う思され、世の人も心ある限りは歎きけり。御子どもは、いづれともなく、人柄目易く世に用ゐられて、心地よげに物し給ひしを、こよなう鎮まりて、三位中將

なども、世を思ひ沈める様こよなし。かの四の君をも、なほ離れなくに通ひつゝ、めざましうもてなされたれば、心解けたる御塔の中にも入れ給はず。思ひ知れとにや、この度の司召にも漏れぬれど、いとしも思ひ入れず、大將殿期う静かにておはするに、世は果敢なきものと見えぬるを、まして理と思しなして、常に参り通ひ給ひつゝ、學問をも遊びをも諸共にし給ふ。往時物狂ほしきまで、挑み聞え給ひしを思し出でて、互に今も果敢なき事につけつゝ、流石に挑み給へり。春秋の御讀經をば然るものにて、臨時にも、さまざま尊き事どもをさせ給ひなどして、又徒らに暇ありげなる博士ども召し集めて、文作り讀寒きなど様の、すさび業どもを爲など心を遣りて、宮仕をもをさくし給はず、御心に任せて打遊びておはするを、世の中には、煩はしき事どもやうく言ひ出づる人々あるべし。

夏の雨長閑に降りて、つれづれなる頃、中將、然るべき集ども、數多持たせて参り給へり。殿にも、文彫開かせ給ひて、まだ開かぬ御厨子どもの、珍らしき古集の故無からぬ、少し選り出でさせ給ひて、その道の人々、態とはあらねど數多召したり。殿上人も大學のもの、いと多う集ひて、左右にこまどりに方分たせ給へり。賭物どもなど、いと二なくて挑み合へり。寒き持て行く儘に、難き韻の文字どもいと多くて、覚えある博士どもなどの惑ふ所々を、時々打宣ふ様、いとこよなき御才の程なり。「如何で斯うしも足らひ給ひけむ。なほ然るべきにて、萬づの事人に勝れ給へるなりけり」と愛で聞ゆ。遂に右負けにけり。二日許りありて、中將負けわざし給へり。事事しうはあらで、艶きたる繪破子ども、賭物など様々にて、今日も例の人々多く召して文など作

らせ給ふ。階の下の薔薇、氣色許り咲きて、春秋の花盛りよりもしめやかにをかしき程なるに、打解け遊び給ふ。中將の御子の、今年始めて殿上する、八つ九つ許りにて、聲いと面白く、笙の笛吹きなどするを、慈み玩び給ふ。四の君腹の次郎なりけり。世の人の思へる寄せ重くて、覺え殊に傳けり。心ばへもかどくしう、容貌もをかしうて、御遊びの少し亂れゆく程に、「高砂」を出して謠ふ、いと愛し。大將の君、御衣脱ぎて纏頭給ふ。例よりは打亂れ給へる御顔の匂ひ、似るものなく見ゆ。羅の直衣單衣を著給へるに、透き給へる肌つき、ましていみじう見ゆるを、年老いたる博士共など、遠く見奉りて涙落しつゝ居たり。「逢はましものを百合葉の」と歌ふ綴めに、中將御土器参り給ふ。

中將「それがと今朝開けたる初花に劣らぬ君が匂ひをぞ見る
微笑みて取り給ふ。

源時ならで今朝咲く花は夏の雨に萎れにけらし匂ふ程無く
衰へにたるものを」と打さうどきて、らうがはしく聞召しなすを、咎め出でつゝ強ひ聞え給ふ。多かめりし事どもも、斯様なる折の眞ほならぬ事數々に書きつくる、心無き業とか、貫之が諫めたる方にて、むつかしければ止めつ。皆この御事を譽めたる筋にのみ、倭の唐のも作り續けたり。我が御心地にもいたう思し驕りて、源文王の子武王の弟」と、打誦し給へる、御名告さへぞ實にめでたき。成王の何とか宣はむとすらむ、そればかりや心もとなからむ。帥の宮も常に渡り給ひつゝ、御遊びなどもをかしうおはする宮なれば、今めかしき御開どもなり。

その頃尙侍の君罷出給へり。瘧病に久しう惱み給ひて、禁厭なども心易くせむとてなりけり。修法など始めて、おこたり給ひぬれば、誰もく嬉しう思すに、例の珍らしき隙なるをと、聞え交し給ひて、理無き様にて夜なく對面し給ふ。いと盛りに、賑はしき氣はひし給へる人の、少し打惱みて、瘦々になり給へる程、いとをかしげなり。後の宮も一所におはする頃なれば、氣はひいと怖ろしけれど、斯かる事しも増る御癖なれば、いと忍びて度重なり行けば、氣色見る人々もあるべかめれど、煩はしうて、宮には然なむと啓せず、大臣、はた思ひかけ給はぬに、雨俄におどろくしう降りて、雷いたう鳴り騒ぐ曉に、殿の君達、宮司など立ち騒ぎて、此方彼方の人目繁く、女房どもも懼ぢ惑ひて近う集ひ參るに、いと理無く出で給はむ方なくて、明け果てぬ。御帳の周りにも、人々繁く竝み居たれば、いと胸潰らはしく思さる。心知りの人二人ばかり、心を惑はす。雷鳴り止み、雨少し小歇みぬる程に、大臣渡り給ひて、先づ宮の御方におはしけるを、村雨の紛れにて、得知り給はぬに、輕らかにふと這ひ入り給ひて、御簾引き上げ給ふまゝに、右大臣如何にぞ。いと憂たてありつる夜の様に、思ひ遣り聞えながら、參り來でなむ。中將、宮の亮など侍ひつやなど、宣ふ氣はひの舌疾にあはつけきを、大將は物の紛れにも、左大臣の御有様ふと思し比べられて、喩なくぞ微笑まれ給ふ。實に入り果てても宣へかした。尙侍の君いと佗びしう思されて、やをら膝行り出で給ふに、面のいたう赤みたるを、猶惱ましう思さるゝにやと見給ひて、右大臣など御氣色の例ならぬ。物怪などのむつかしきを、修法延べさすべかりけりと宣ふに、薄二藍なる帶の、御衣に纏はれて引き出でられたるを見つけ給ひて、怪しと思すに、

又疊紙の手習などしたる、御几帳の下に落ちたりけり。これは如何なる物どもぞと、御心驚かれて、右大臣彼れは誰がぞ。氣色異なる物の様かな。賜へ。それ取りて誰がぞと見侍らむ」と宣ふにぞ、打見かへりて、我も見つけ給へる。紛らはすべき方も無ければ、いかゞは答へ聞え給はむ。我にもあらでおはするを、子ながらも恥かしと思すらむかしと、然ばかりの人は思し憚るべきぞかし。されどいと急に、のどめたる所おはせぬ大臣の、思しも廻さずなりて、疊紙を取り給ふまゝに、几帳より見入れ給へるに、いといたうなよびて、憤ましからず添ひ臥したる男もあり。今そやをら顔引き隠して、兎角紛らはす。淺ましう、目ざましう、心疚しけれど、直面には如何でか顯はし給はむ。目も昏るゝ心地すれば、この疊紙を取りて、寢殿に渡り給ひぬ。尙侍の君は、我れかの心地して死ぬべく思さる。大將殿も、いとほしう、遂に用なき振舞の積りて、人のもどきを負はむとする事と思せど、女君の心苦しき御氣色を、とかく慰め聞え給ふ。大臣は、思ひの儘に、籠めたる所おはせぬ本性に、いと老の御僻さへ添ひ給ひにたれば、何事にかは滞り給はむ。ゆくゝと宮にも愁へ聞え給ふ。右大臣斯うくの事なむ侍る。この疊紙は右大將の御手なり。昔も心免されて有り初めにける事なれど、人柄に萬づの罪を免して、然ても見むと言ひ侍りし折は、心も留めず、めざましげにもてなされにしかば、安からず思ひ給へしかど、然るべきにこそはとて、世に穢れたりとも、思し棄つまじきを頼みにて、斯く本意の如く奉りながら、猶その憚りありて、うけぱりたる女御なども言はせ侍らぬをだに、飽かず口惜しう思ひ給ふるに、又斯かる事さへ侍りければ、更にいと心憂くなむ思ひなり侍りぬる。男の例とは言ひな

がら、大将もいと怪しからぬ御心なりけり。齋院をも猶聞え犯しつゝ、忍びに御文通はしなどして、氣色ある事など、人の語り侍りしをも、世の爲のみにもあらず、我が爲にも宜かるまじき事なれば、よも然る思ひ遣りなき業し出でられじとなむ、時の有職と、天の下を靡かし給へる様殊なめれば、大将の御心を、疑ひ侍らざりつる」など宣ふに、宮はいとよしき御心なれば、いと物しき御氣色にて、弘徽殿帝と聞ゆれど、昔より皆人思ひ賤し聞えて、致仕の大臣も、又なく傳く一つ女を、兄の坊にておはするには奉らで、弟の源氏にて幼きが、元服の添隊に取分き、又この君をも宮仕にと志して侍りしに、痴がましかりし有様なりしを、誰もく怪しとや思したりし。皆彼の御方にこそ御心寄せ侍るめりしを、その本意違ふ様にてこそは、斯くても侍ひ給ふれど、いとほしさに、如何で然る方にも、人に劣らぬ様にもてなし聞えむ。然ばかり妬げなりし人の見る所もありなどこそは、思ひ侍りつれど、強ひて我が心の入る方に、靡き給ふにこそは侍らめ。齋院の御事はまして然も有らむ。何事につけても、朝廷の御方に後安からず見ゆるは、春宮の御世心寄せの異なる人なれば、理になむあめる」と、すく／＼しう宣ひ續くるに、流石にいとほしう、何と聞えつる事ぞと思さるれば、右大臣然れば、暫し此の事漏らし侍らじ。内裏にも奏せさせ給ふな。斯くの如罪侍りとも、思し棄つまじきを頼みにて、甘えて侍るなるべし。内々に制し宣はむに、聞き侍らずば、その罪には唯自ら當り侍らむ」など聞え直し給へど、殊に御氣色も直らず。かく一所におはして隙も無きに、憤む所なう、さて入り物せらるらむは、殊更に輕め弄ぜらるゝにこそはと思しなすに、いとよみじう目ざましく、この序に然るべき事ども構へ出でむに、よ

き便なりと思し廻らすべし。

花散里

源氏物語

人知れぬ御心づからの物思はしきは、何時と無き事なめれど、斯く大方の世につけてさへ、煩はしう思し亂るゝ事のみ増れば、物心細く、世の中なべて厭はしう思しならるゝに、流石なる事多かり。麗景殿と聞えしは、宮達もおはせず、院隠れさせ給ひて後、いよゝ哀れなる御有様を、唯この大將殿の御心に持て隠されて、過し給ふなるべし。御妹の三の君、内裏邊にて、果敢なく仄めき給ひし名残、例の御心なれば、流石に忘れも果て給はず、態ともてなし給はぬに、人の御心をのみ盡くし果て給ふべかめるをも、この頃残る事なく思し亂るゝ世の哀れの種はひには、思ひ出で給ふに、忍び難くて、五月雨の空、珍らしう晴れたる雲間に渡り給ふ。何ばかりの御装ひなく、打簀して、御前なども殊に無く、忍び給へり。中川の程おはし過ぐるに、さゝやかなる家の木立など由ばめるに、能く鳴る琴を東琴に調べて掻合はせ、賑ははしく弾き鳴らすなり。御耳留りて、門近なる所なれば、少し差出でて見入れ給へば、大きな桂の木の追風に、祭の頃思し出でられて、そこはかと無く氣はひをかききを、唯一目見給ひし宿りなりと、思ひ出で給ふに、たゞならず。程程にけるを、おほめかしくやと憤ましけれど、過ぎ難にやすらひ給ふ。折しも郭公鳴きて渡る。催し聞え顔なれば、御車推し返させ給ひて、例の惟光を入れ給ふ。

源をちかへりえぞ忍ばれぬ郭公仄語らひし宿の垣根に

寝殿と思しき屋の、西の端に人々居たり。前々も聞きし聲なりければ、聲作り氣色とりて、御消息聞ゆ。若やかなる氣色ども數多して、おほめくなるべし。女郭公語らふ聲はそれながらあな覺束な五月雨の空殊更に辿ると見れば、惟光よし／＼、植ゑし垣根も一とて出づるを、人知れぬ心には、妬うも哀れにも思ひけり。然も憤むべき事ぞかし。理にも有れば、流星なり。斯様の際に、筑紫の五節が、らうたげなりしはやと、先づ思し出づ。如何なるにつけても、御心の暇なく苦しげなり。年月を経ても、なほ斯う様に、見し邊の情は、過し給はぬにしも、なか／＼數多の人の物思ひ種なり。さてかの本意の所は、思し遣りつるも著く、人目なく靜かにておはする有様を見給ふも、いと哀れなり。先づ女御の御方にて、昔の御物語など聞え給ふに、夜更けにけり。二十日の月さし出づる程に、いと々木高き陰ども木暗う見え渡りて、近き橋の薫り懐かしく匂ひて、女御の御氣はひ、老成にたれど飽くまで用意あり、貴にらうたげなり。勝れて花やかなる御覺えこそ無かりしかど、睦まじう懐かしき方には、思したりしものをなど、思ひ出で聞え給ふにつけても、昔の事かき列ね思されて、打泣き給ふ。郭公、有りつる垣根のにや、同じ聲に打鳴く。慕ひ來にけるよと思さるゝ程も、艶なりかし。如何に知りてか。など、忍びやかに打誦し給ふ。

源橋の香を懐かしみ郭公花散る里を尋ねてぞ訪ふ
往時の忘れ難う思ひ給へらるゝ慰めには、先づ参り侍りぬべかりけり。こよなくこそ紛るゝ事も數添ふ事も侍りけれ。大方の世に隨ふものなれば、昔語りもかき崩すべき人少なうなり行くを、

まして如何に、つれづれも紛るゝ事なく思さるらむ」と聞え給ふに、いと更なる世なれど、物をいと哀れと思し續けたる御氣色の淺からぬも、人の御様からにや、多く哀れぞ添ひにける。

女御人目なく荒れたる宿は橘の花こそ軒のつまとなりけれ

と許り宣へるも、然はいへど人にはいと殊なりけりと、思し比べらる。西面には、態となく忍びやかに打振舞ひ給ひて覗き給へるも珍らしきに添へて、世に目慣れぬ御様なれば、辛さも忘れぬべし。何や彼やと、例の懐かしく語らひ給ふも、思さぬ事にはあらざるべし。假にも見給ふ限りは、おしなべての際には有らねばにや、様々につけて、言ふ甲斐無しと思さるゝは無ければにや、憎げなく、我も人も情を交しつゝ、過し給ふなりけり。それをあいなしと思ふ人は、とにかくに變るも、理の世の性と思ひなし給ふ。有りつる垣根も、然様にて有様變りにたる邊なりけり。

岩波文庫教科書版

7

昭和七年四月十六日印刷
昭和七年四月廿日發行

源氏物語(一)★★

定價四十錢

校訂者

島津久基

發行者

東京市神田區一ツ橋通町三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
菊地眞次郎

株式會社英秀印刷

發行所

東京市神田區
一ツ橋通町三番地

岩波書店

電話〇一八七・〇一八八
九段〇三三九・〇一八〇
振替口座東京二六二四〇番

岩波文庫教科書版目録

裝幀 四六
表紙フワイバ
一冊

第一編	古事記	幸田成友校訂	定價二十錢
第二編	白文萬葉集	佐佐木信綱校訂	定價一圓
第三編	白文萬葉集	佐佐木信綱校訂	定價八十錢
第四編	新訓萬葉集	佐佐木信綱編	定價八十錢
第五編	新訓萬葉集	佐佐木信綱編	定價六十錢
第六編	古今和歌集	尾上八郎校訂	定價四十錢
第七編	源氏物語	鳥津久基校訂	定價四十錢
第八編	源氏物語	鳥津久基校訂	定價四十錢
第九編	源氏物語	鳥津久基校訂	定價四十錢
第十編	源氏物語	鳥津久基校訂	定價六十錢
第十一編	源氏物語	鳥津久基校訂	定價六十錢

第十二編	枕草子	池田龜鑑校訂	定價四十錢
第十三編	枕草子	池田龜鑑校訂	定價四十錢
第十四編	枕草子	池田龜鑑校訂	定價四十錢
第十五編	大鏡	和田英松校訂	定價四十錢
第十六編	新古今和歌集	佐佐木信綱校訂	定價六十錢
第十七編	平家物語	山田孝雄校訂	定價四十錢
第十八編	平家物語	山田孝雄校訂	定價六十錢
第十九編	徒然草	西尾實校訂	定價二十錢
第二十編	奥の細道	伊藤松宇校訂	定價二十錢
第二十一編	日本永代藏	和田萬吉校訂	定價二十錢
第二十二編	世間胸算用	和田萬吉校訂	定價二十錢

附記——本叢書は、高等諸學校教科用に供するを目標として編輯したものであるが、一般國文學研究者に取つて非常に便利な書入本となり得ると信じます。

讀書子に寄す

岩波文庫發刊に際して

岩波 茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學識が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に廣く立たしめ民衆に仇なしをせよであらう。近時大量生産的出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽する全編が其編輯に眞金の用意をなしたるか。千古の典籍の驕慢企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を驚愕して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する愚癡解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推舉するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するに於て十數年以前より志して來た計畫を慎重審議の如何を問行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亘つて文藝哲學社會科學自然科學各種の如何を問活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排し自ら故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最良の力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることと吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

國文學	新萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ***	源氏物語 下卷 山田孝雄校訂 ***	日蓮上人 抄 姉崎正治校注 ***
	新萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ***	源氏物語 (一) 島津久基校訂 ***	歎 異 抄 金子大榮校訂 ***
	新萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ***	源氏物語 (二) 島津久基校訂 ***	徒 然 草 西尾實校訂 ***
	新萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ***	土佐日記 池田龜藏校訂 ***	方 丈 記 山田孝雄校訂 ***
	白萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ***	紫式部日記 池田龜藏校訂 ***	申 樂 談 義 野上阿彌校訂 ***
	白萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ***	更級日記 西下橋一校訂 ***	花 傳 書 野上阿彌校訂 ***
古 事 記 幸田成友校訂 ***	枕草子(春曙抄) 上 池田龜藏校訂 ***	奥の細道 その他 伊藤松字校訂 ***	芭蕉七部集 伊藤松字校訂 ***
古 日本書紀 上卷 黒板勝美編 ***	枕草子(春曙抄) 中 池田龜藏校訂 ***	芭蕉連句集 小宮豊隆編 ***	芭蕉七部集 伊藤松字校訂 ***
古 日本書紀 中卷 黒板勝美編 ***	倭漢朗詠集 山田孝雄校訂 ***	蕪村七部集 伊藤松字校訂 ***	蕪村七部集 伊藤松字校訂 ***
古 語 拾 遺 加藤玄智校訂 ***	古今和歌集 尾上八郎校訂 ***	風俗文選 伊藤松字校訂 ***	風俗文選 伊藤松字校訂 ***
水 鏡 和田英松校訂 ***	新古今和歌集 佐佐木信綱校訂 ***	鴉 衣 石田元季校訂 ***	鴉 衣 石田元季校訂 ***
大 鏡 和田英松校訂 ***	新古今和歌集 佐佐木信綱校訂 ***	おらが春・我春集 一 萩原井水校訂 ***	おらが春・我春集 一 萩原井水校訂 ***
三條西 榮花物語 三條西公正校訂 ***	新金槐和歌集 菅原茂吉校訂 ***	風柳多留 上卷 西原柳雨校訂 ***	風柳多留 上卷 西原柳雨校訂 ***
三條本 伊勢物語 尾代弘賢校訂 ***	藤原定家集(附家年譜) 佐佐木信綱校訂 ***	風柳多留 中卷 西原柳雨校訂 ***	風柳多留 中卷 西原柳雨校訂 ***
竹取物語 附録 島津久基校訂 ***	法華義疏 上卷 藤田太子御説 花山信勝校訂 ***	風柳多留 下卷 西原柳雨校訂 ***	風柳多留 下卷 西原柳雨校訂 ***
平家物語 上卷 山田孝雄校訂 ***	正法眼藏隨聞記 和辻哲朗校訂 ***	萬載狂歌集 野崎左文校訂 ***	萬載狂歌集 野崎左文校訂 ***

れる様に、小さい形の中に、深山の内容を盛り形式を採りました。
 □ 購求の自由 しかも購者が全く自由に欲しい本を随時求められる自由選擇の方法を採りました。
 □ 印刷の鮮明、校正の精確、製本の堅牢等の實際的方面に於ても亦最善を期します。
 □ 價裁は菊半裁判、紙裝、平福百穂畫伯裝幀
 □ 活字は八ポイントを用ひました。
 □ 約百頁を單位として星一つを以てそれを現はし、★一つ毎に二十錢の定價です。
 □ ★一つを1に算へて此の文庫の番號を進めてゆきます。
 □ 番號はただ發行順に従つて之を追ふものであります。
 □ ★★或は★★★は、それぞれ二百頁或は三百頁の本一冊なることを示し、百頁づつの分冊ではありません。
 □ 送料(及び定價)は左表の通りです。
 ★ 定價二十錢 送料二錢
 ★★ 四十錢 四錢
 ★★★ 六十錢 四錢
 ★★★★★ 八十錢 六錢

御註文は前金で御願ひ致します。小さい本で極度の廉價なものですから必ず送料はお添へ下さい。切手代用は一切増に願ひます。

◆ 岩波文庫新刊書目 ◆

- 源 氏 物 語 四 島津久基校訂 ★★
- 三條西榮花物語中巻 三條西公正校訂 ★★
- 煤 煙 森田 草平作 ★★
- 支那通俗古今奇觀 青木正兒校訂 ★
- 獅子座の流星群 ロマン・ロラン作 ★
- マルクス神聖家族或は石堂清倫譯 ★★
- エンゲルス批判的批判の批判 三木 清譯 ★★
- 史 的 的 見 たる スリンテ・アレーニウス著 ★★
- 科學的宇宙觀の變遷 寺田 寅彦譯 ★★

終

